

同志社大学政治学研究会 一回生企画勉強会

政策学部政策学科 2009年度生 北川 雄也

中南アフリカはなぜ発展しないのか

～中南アフリカの過去・現在を振り返り、未来の発展～

1. はじめに

今回、初めて自分が受け持つ勉強会だということで、どのようなテーマにしようかと考えていると、自分が一番興味の持つ国際情勢をテーマにしようと思いました。総体的なテーマにするのは自分にはまだ荷が重いと感じたので、とりわけ地域情勢に着目しようと考えました。その結果、中南アフリカ情勢の分析が一応のテーマとなりました。中南アフリカは、他の地域、たとえばアジア、ヨーロッパなどに比べると幾分注目度が低く、新聞・テレビに取り上げられるにしても「貧困」の現状ばかりが取り上げられ、実際その原因について取り上げられる機会は、少ないように感じられます。今回の勉強会では、45分間で中南アフリカにおける貧困の根本的原因を皆さんに知っていただければ成功だと思っています。（難しいですね！）

ちなみにアフリカ全図を添付資料として皆さんに配っておきます。ご参照ください。（アフリカの地理を完璧に理解している人はほとんどいないでしょう。自分も地図を見ないと分からなくなります。）また、「中南アフリカ」の国々を取り上げますので、エジプト・マグレブ諸国（リビア・チュニジアなど）といった北アフリカの国々は対象としません。ご了承ください。

2. 中南アフリカ概略

まずは、本論に入る前にさらっと中南アフリカについておさらいしましょう。気候はほとんどの地域が熱帯雨林気候または砂漠気候（またはそれに準じるステップ気候やサバナ気候）であり（南アフリカは温暖な気候だそうです。）、厳しくも豊かな自然条件です。人種はもちろん黒色人種中心ですがスーダンやモーリタニアといった国ではアラブ系が主流です。（南スーダンは黒色人種の人が多いため人種間での対立←ダルフル紛争）南アフリカでは、オランダ植民地時代からの移民（ボーア人）やイギリス植民地時代にやってきた移民といったような白色人種の人々が住んでいます。といっても黒人が9割なのでマイノリティです。（アパルトヘイト政策は有名ですね。白色人種が黒色人種を弾圧する時代が最近までありました）また、中南アフリカのほとんどの国々は、イギリスやフランスといった欧州の大国の植民地でした。

（ex.ナイジェリアはイギリス、コンゴ民主共和国（旧ザイール）はベルギー

同志社大学政治学研究会 一回生企画勉強会

政策学部政策学科 2009年度生 北川 雄也

の植民地)近代以降、アフリカの年と呼ばれる1960年あたりまではほとんどの国は植民地とされていました。(リベリアは早くにアメリカから独立、エチオピアはムッソリーニのイタリア軍に降伏するが、まもなくして独立)1960年以降、独立をした中南アフリカの国々は、躍進するだろうと考えられていました。それは、資源が豊富であったからです。南アフリカにはダイヤモンド、コンゴ民主共和国にはレアメタル、ナイジェリア、アンゴラなどでは石油というように。しかし、それ以前の問題として植民地時代の国境線に大きな問題がありました。まったく部族の関係などは考慮に入れない国境の線引きをしてしまったのです。

よって多数の部族が入り混じるような形で国家が出来上がってしまい、内戦が多発したのです。(冷戦真只中であつたため、東側対西側の構図の内戦が相次いだ。)また、資源が豊富というのも皮肉なことに内戦をより激化してしまうことになりました。(詳しくはまたあとで)

3. 破綻国家

今のアフリカには四つのタイプがある。①政府が順調に国づくりを進めている国家。②政府に国づくりの意欲はあるが、運営手腕が未熟なため進捗が遅い国家。③政府幹部が利権を追い求め、国づくりが遅れている国家。④指導者が利権にしか関心を持たず、国づくりなど初めから考えていない国家。

そして、①に該当するのはボツワナだけで、②がガーナ、ウガンダ、マラウイなど十カ国程度、③がアフリカでは最も一般的で、ケニア、南アフリカなど。

④はジンバブエ、アンゴラ、スーダン、ナイジェリア、赤道ギニアなどだ。(松本仁一著「アフリカ・レポートー壊れる国々、生きる人々」より抜粋)

残念なことながら、アフリカには主権の維持、領土の管理、国民の統合あるいは経済の自立に失敗し、政府機能の麻痺、社会の崩壊、国民の分裂、経済的破綻などにより国民国家として自立できなくなった国家「破綻国家」(中西 寛、田中 明彦編「新・国際政治経済の基礎知識」より抜粋)があります。④にあるジンバブエや、ソマリア、ルワンダ、シエラレオネなどが「破綻国家」に該当します。ジンバブエ以外はいずれも内戦によって政府機能が麻痺したといえるでしょう。それでは、破綻国家に該当する主な国3つ(ジンバブエ、ソマリア、ルワンダ)のそれぞれの独立後の歩みを見ていくことにしましょう。

(1) ジンバブエの場合

ジンバブエといえば、中南アフリカの中では今もっとも話題になっている国ではないでしょうか。それも悪い意味で。インフレ率が天文学的数値にまで上昇したのには呆れてしまいました。どうすればインフレ率がこんなにも上がる

同志社大学政治学研究会 一回生企画勉強会

政策学部政策学科 2009年度生 北川 雄也

のでしょうか？答えは、ロバート・ムガベ大統領の独裁政治と経済政策の失敗にあります。まず、その前に少しジンバブエの歴史を振り返って見ましょう。

ジンバブエはもともとイギリスの植民地で、独立後もローデシア共和国と呼ばれていました。ローデシア共和国は、白人至上主義者のイアン・スミスを首相として黒人を差別する政策をとっていきました。その結果、黒人たちが反旗を翻し、ローデシア紛争を起こします。その主役がロバート・ムガベでした。黒人側が勝利した後は、国号をジンバブエ共和国に改め、ロバート・ムガベが首相に、しばらくして大統領に就任しました。

当初は、白人にも寛容な政策をとったため、イギリスやアメリカからも高く評価されました。しかし、2000年頃から化けの皮がはがれていきます。もともと、ムガベは白人を嫌っていました。それに加え、「アフリカ大戦」と呼ばれたコンゴ紛争に軍を派兵したことで資金が足りなくなりそうになっていました。そこでムガベは、白人の所有する農地を接収していくことにしました。ムガベは、白人の土地を奪うことで、ジンバブエ国民の反白人感情を煽り、ローデシア紛争時に活躍した闘士たちに土地を与えることができ（当時、ムガベに対する不満がたまっていたといわれる）、自分たちも私腹を肥やすことができると考えました。

しかし、結果はそううまくはいきませんでした。白人の農地を奪ったことで多くの国民が職を失ってしまいました。（黒人も白人も）得をしたのは、ムガベの側近たちや昔の闘士たちだけで、その人たちがまともに農業などをするはずもありませんでした。農作物の収穫高は急速に落ち、物価が上昇していきます。そこで、ムガベは物価を強制的に下げてしまいます。（パンなど食料品からありとあらゆるもの）そんなことをしてしまうと、品物を売ってもほとんどお金を手に入れることができなくなるので、品物は店頭から消えていき、人々はより物を手に入れづらくなります。また、物価の上昇に伴い紙幣を乱発したりしたため、経済は完全に破綻しつつある状態です。

今以前のジンバブエは、農業大国で工業などもそこそこ発展していたので、うまく引き継ぐことができれば、順調に発展していくのではないかと考えられました。現に、そのような時代もあったわけです。しかしながら、白人の農地などを接収するという政策が発展の夢をぶち壊してしまいました。

ジンバブエ国民は、今コレラ大流行の危機に直面しています。衛生状態が極度に悪化しているからです。さらに、独裁政権であるムガベ政権は、野党陣営を徹底的に弾圧していて、暴力で脅したりしています。野党MDCのモーガン・ツヴァンギライ議長は、昨年行われた大統領選に出馬しますが、決選投票で惜しくもムガベに敗れました。都市部では、ツヴァンギライ議長が有利に進めて

同志社大学政治学研究会 一回生企画勉強会

政策学部政策学科 2009年度生 北川 雄也

いたようですが、地方ではムガベ陣営側の選挙員が普段から野党支持者を弾圧し、暴力をふるってきました。選挙の当日も、選挙管理員としてムガベ陣営の者が多く配置されたため、地方住民たちは、ムガベに投票せざるを得なかったといわれています。

(2) ソマリアの場合

ソマリアといえば、最近日本の自衛隊が派遣されたということで知られているのではないのでしょうか。日本の自衛隊が派遣されるということは、いろいろな国の協力を仰がないと解決できないのかと勘繰ってしまいますが、その通りではあります。そもそも、なぜ派遣されたのかというと、ソマリアとイエメン海域周辺で海賊が船を乗っ取るからです。海賊は、銃を持っているので、従わなければ殺されてしまいます。今までも、日本の輸送船やウクライナの輸送船など数え切れないほどの船が被害を受け、世界の船舶運送システムの障害にもなっています。(アジアからヨーロッパに抜けるには一番手っ取り早いコースであるから)でも、なぜソマリアに海賊がたくさんいるのでしょうか？

一つの原因として考えられるのは、ソマリアを一つに束ねられる勢力がないということです。「暫定政府」ならありますが、首都のモガディシュと周辺海岸部のみしか制圧できていません。日本でいう、戦国時代ですが、その中でも応仁の乱直後という感じでしょうか。(1991年までは独裁政権のバーレ政権がソマリア全域を支配) 信長はもしかしたらいるかもしれませんが、秀吉や家康はいそうにもありません。そんな状態の中で、隣国エチオピアが介入したときもあったので、ソマリアは荒廃しています。(ソマリランドは独立は承認されていないが、自治政府としてうまく機能している) 無法地帯では、何をやっても逮捕されないのが、海賊たちは好き放題やらかします。

また、ソマリアではイスラーム教が主流で、裁判もイスラーム法(シャリーア)によって行われています。また、各勢力ごとで規範は異なるようですが、他のアフリカ諸国とは異なり、ソマリアはソマリ人だけで構成される単一民族国家です。ですから、部族対立などはないのですが、親政府組織と反政府組織が点々ばらばらとしている状態です。最近のCNNのレポートによると、反政府組織のアルシャバブ(南部を制圧)アルカイダが一枚噛んでいるらしいです。アルカイダの狙いは、アフガニスタン、イラクに続いてソマリアを「テロの聖地」にしてしまうということでしょう。ソマリアなら誰も邪魔はしてこないという考えからでしょうか。確かに、ソマリアには、昔は国連軍などが派兵されていましたが、あまりにも被害が大きいため撤退していきました。もし、アルカイダにソマリアが制圧されたら、どうなるのでしょうか？そこまではないとしても、アフガニスタンのタリバンのようにアルカイダは積極的にアルシャバブ

同志社大学政治学研究会 一回生企画勉強会

政策学部政策学科 2009年度生 北川 雄也

を支援していくでしょう。アルカイダの進出を抑えるためにも、暫定政府はがんばらなくてはなりません、最近の戦況を見てみると厳しそうです。

(3) ルワンダの場合

ルワンダの状況を語る時、必ず必要なことはフツ族とツチ族についてのことです。この2つの部族が、ルワンダ大虐殺で大きな傷を負ったのだから。

ベルギーの植民地になる以前、2つの部族は、分業をしてお互いに対立をほとんどすることなく過ごしてきました。フツ族は農耕を専門とし、ツチ族は牧畜を専門としていました。特に部族間に顔の特徴の違いがあるわけではなく、なぜ部族が分かれたのかはまだ解明されていません。もしかすると農耕をやるか牧畜をやるかで部族を分けていただけかもしれません。

しかし、ベルギーが植民地にすると、ツチ族は、ナイル川周辺から渡来してきたのだから、フツ族のような原住民よりも頭が賢いという説をでっち上げ、ツチ族を優遇しました。その結果、フツ族とツチ族の待遇の違いによる対立が深まっていきました。独立した後は、ベルギー政府が置き土産として置いていった選挙で、フツ族が圧勝。フツ族の大統領が就任し、今度はフツ族が優遇されるようになりました。ツチ族は迫害を恐れ、隣国ウガンダなどに亡命し、後にその一部が「ルワンダ愛国戦線」を結成しルワンダに侵攻し、ルワンダ内戦へ。その後和平締結までに至るが、今度はフツ族強硬派が台頭し、飛行機に乗っていたフツ族穏健派の大統領を暗殺し、ルワンダ大虐殺へと進展していきます。ルワンダ大虐殺では、フツ族強硬派が、ルワンダに住むツチ族や融和派のフツ族の住民までを虐殺し、死者数は50万人にも及びました。(第一次世界大戦の死者数よりも多く、第二次世界大戦の死者数にもわずかに及ばないほど)

その後は、フツ族強硬派が怠慢であったことから、ツチ族の「ルワンダ愛国戦線」に敗れ、ルワンダ愛国戦線のリーダーであったポール・カガメがルワンダの大統領に就任しています。しかし、フツ族とツチ族の深い傷は癒えることはありません。現在は、表向き、差別的措置はとられていないとされていますが、フツ族の候補者が大統領選に立候補すると逮捕されるなどの事態になっており、未だに対立は続いています。ただ、ルワンダについては「破綻国家」というカテゴリーから抜け出しつつあります。公務員改革・汚職の廃止を積極的に行っているとされ、GDPなども向上しつつあります。

4. 結局なぜ中南アフリカは発展しないのか

まず初めに、第3章で述べた3つの例は、中南アフリカの国々の中でも極端な例であります。しかし、3つの国々にあげられたさまざまな悲劇的な部分要素は、ほとんどの国が持っているといえます。特に内戦や虐殺はシエラレオネ、

同志社大学政治学研究会 一回生企画勉強会

政策学部政策学科 2009年度生 北川 雄也

アンゴラ、コンゴ、ナイジェリア、南アフリカなどたくさんの国々で起きています。冷戦時代までは、東西対立が内戦の直接的原因であったのですが、冷戦解消以降の内戦については部族間の混沌としたものになっています。

そもそもなぜ内戦が起きるかという点、部族主義がアフリカに根ざしているからです。アフリカの人々は、身内には非常に優しい人が多いといわれています。エイズによって両親が亡くなり孤児になった孫や親戚の子どもたちを引き取って世話をする人の存在が多いことからわかると思います。その延長線上に部族主義があります。ですから他の部族の台頭などを嫌います。自分の部族の利益を守るために。さらに資源が結びつくと、余計に内戦の火が広がり収拾がつかなくなってしまうのです。資源は大きな金になる武器でもありますが利権の象徴でもあるのです。

また、ジンバブエのように経済政策の不得手な国々も多く、グローバル化している現代国際社会に対して、アフリカの国々は、自分たちの利益を守るため、産業を自分たちのものにして、閉鎖され気味の経済システムであることが多いです。

冷戦の影響で、ソ連などから社会主義システムを教わりそれを信奉し続ける独裁者もいればそれにはかかわらず、国のものはすべて自分のものだと考える独裁者もいるのです。独裁政権でなくても、民主的な選挙で首長が選ばれた場合でも、自分たちの部族を優先したがる者が多く、投票者もそのような人物に投票してしまうのです。

ネルソン・マンデラ元南アフリカ大統領のように偉大なる指導者がいたとしても、まわりの側近が賄賂を受け取ることもしばしばです。2009年には、南アフリカの大統領にズマ氏が就任しました。しかし、この人物は、国民からは高い人気を誇っているのですが、汚職の噂が絶えません。裁判も何度か行われ、いずれも無罪判決とはなりましたが、南アフリカの将来に暗雲が立ち込めてきたような気がします。

そして、結論としては、政治家たちがいかにこれから国民のために尽くすことができるかというのが今後の中南アフリカの発展にかかっているといえるでしょう。発展のキーとなる点を自分なりにまとめてみました。

- ① 部族などにこだわらず、国民に平等に富を分配することができるか。
- ② 工場などを国営化するのではなく、資源に係る事業なども民営化して自由貿易を推進していくことができるか
- ③ 黒人、白人といった人種間の差別をなくし、同じスタートラインに立たせる政策をとることができるか（黒人を優遇しすぎている現状）
- ④ 先進国からの援助を、どれだけ国民に還元できるか。（援助金を受け取るだ

同志社大学政治学研究会 一回生企画勉強会

政策学部政策学科 2009年度生 北川 雄也

け受け取って、自分のために使う首長が多い。)

⑤ 公務員改革などを行い、賄賂や汚職をなくすることができるか

そのほかにも、色々な発展のキーがあるとは思いますが、とりあえずこの5つで留めておきます。もし、そのほかにもあると思った方々は、感想の時に言っていただくと非常にありがたいです。ちなみに⑤が個人的には最も大切なことかなと思っています！

5. おわりに

今回は、かなりの量になってしまい、反省しています。おそらく、時間配分が大変なことになっている光景が思い浮かびます。また、グラフやフローチャートなどを入れてもっと工夫をしたレジュメにするべきかなと思いましたが。(おそらく指摘が入るでしょう)

次回の自分の勉強会では、以上の反省を踏まえて、グラフや統計などを用いながら、アフリカにおける開発経済学をやりたいと思っています。(今回はどちらかというと地域情勢の説明で終始した感があるので、より専門的に)と言いつつも、気分が変わり地政学などをやることになるかもしれませんが……。というわけで稚拙な文章を読んでいただき、また、稚拙な説明を聞いていただき本当にありがとうございました！

<参考文献>

- ・アフリカ 苦悩する大陸 ロバート・ゲスト著 伊藤 真訳
東洋経済新報社 2008年
- ・アフリカ・レポート―壊れる国、生きる人々 松本仁一著
岩波書店 2008年
- ・新・国際政治経済の基礎知識 田中明彦・中西寛編
有斐閣 2004年
- ・理解しやすい地理 B 中村泰三編著
三省堂 2003年